



『沼津城普請覚図』^{ぬまつじょうふしんおぼえず} 嘉永元年(1848)9月^{かえい}

新たに収集された資料を紹介し、青野の原井日鳳さんより蒐集してきた史料の一部を寄贈していただきました。この絵図はその内の1点です。虫害によりかなり損傷を受けていますが、裏打ちで補修されています。

沼津城を描いた絵図には、おそらく築城時に幕府への届け出のために作成されたものをベースとし、その後は改修部分だけを修正した、ほとんど同じ構図のものがあります。^{てんぽう}天保10年(1839)、^{まんえん}嘉永3年(1850)、^{まんえん}万延元年(1860)に作成されたものが知られていました。

この絵図も同じ構図のもので、嘉永元年(1848)9月に作成されたものです。城下の大火によって類焼した南端部の大手門周辺の建物や構造物の位置を示し、修補を願い出たものです。同時に焼失した大手門外の番所の移転や破損した二ノ丸冠木門の修補、外廓柵矢来の変更も願い出ています。

水野藩の記録『御代々略記』には、前年の弘化4年(1847)11月の大火によって城内外が類焼し、幕府に修補を願い出、翌年9月16日に許可が下りたことが記されており、この時に提出した図面の写しと考えられます。

■香貫・我入道編 その13 香貫の補遺②

今回のシリーズを閉じるに当たり、地名に限らず様々な事象に触れる際、見方・とらえ方に関する姿勢として、諸説ある中で特定の支持を強調せず、あえて断定を避ける傾向にあった。紹介した内容の大半が初めてであり、また独特な切り口の故に、独り善がりであった点をご容赦願いたい。

●地名で綴る「独り案内」—香貫・楊原の旅— ここでは江戸末期、弘化4年(1847)の沼津藩主の代替わりに伴い、同年7月の「御巡見路」として巡見用に作成した絵図面を下書きにする。三十郎新田の柳下源八による絵図面の写しから、字名や地名を抜粋して見よう。地図の描画に稚拙さはあるが、すでに失われた地名や地理情報も多く、見取の吟味に対して防災面からも、大変貴重でかつ価値の高い史料である。

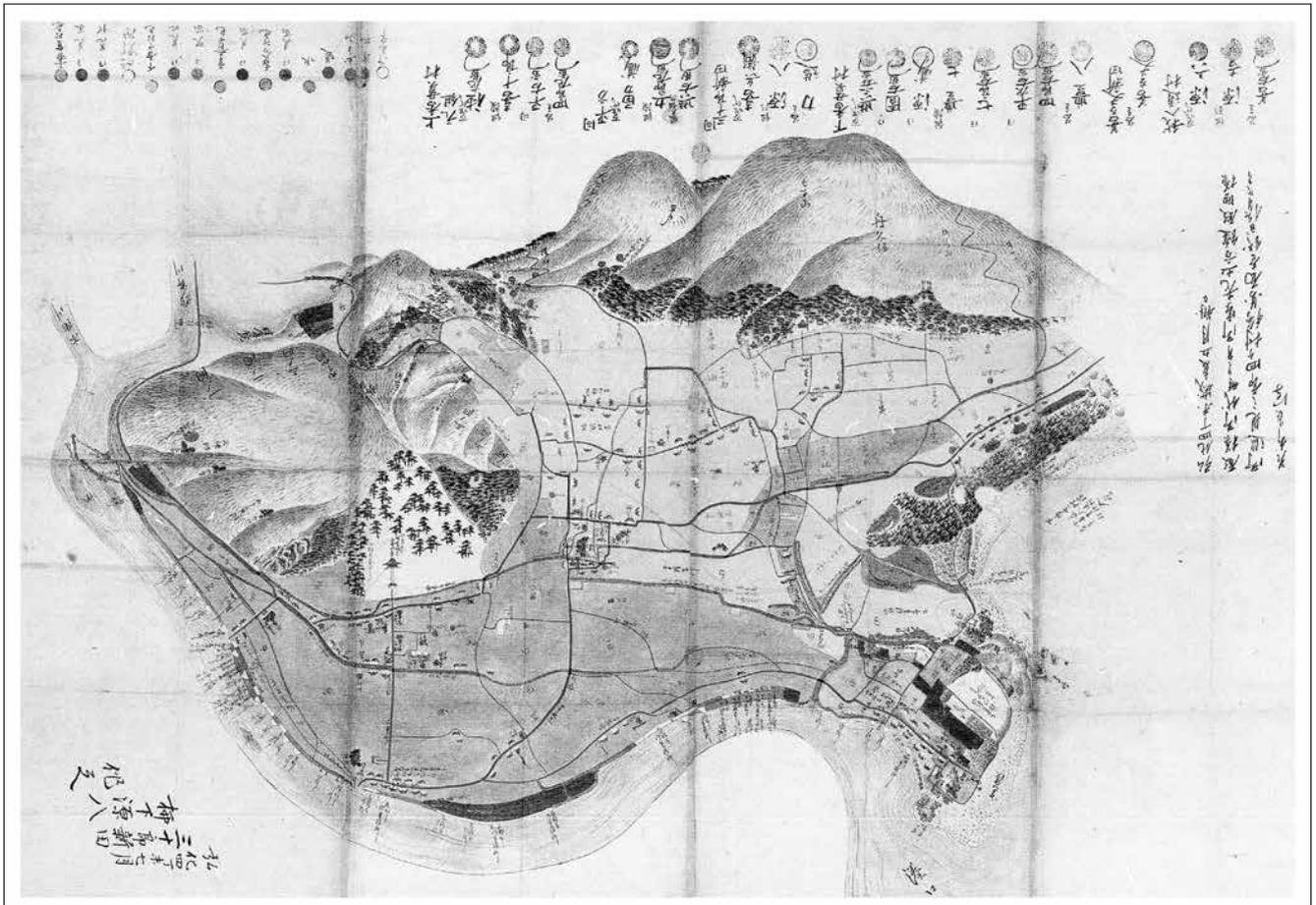
黄瀬川と狩野川との合流点の通称「三又」付近、「禅頭久保」の畑地の北側には「大滝」の瀬がある。狩野川に張り出した「石堰(大滝堰)」は三日月形の一つの「梁(袋堰)」で、水位を高めるために重さ5tにもなる巨大な堰石を積み、普段は流下出来るように、水を払う積み石にも工夫を重ねている。香貫堰の要であり、上香貫・下

香貫両村の入会地で、洪水時に流失した際の維持・管理は藩により施行する工事の普請所である。

「下香貫・善太夫新田水門」は、「下香貫用水」(下堀)の疎水として香貫山裾を「久保」(旧東本郷町)を経て南側に折れ、下香貫分の「宮原」に向かう。同じく堀で隣接する「上香貫水門」からは、「字川久保」の旧字堰下から字中原(現中瀬町)を経て、字黒瀬(現黒瀬町)で「上香貫村三組用水」(上堀)と成る。「字折坂」の坂道と用水路に沿い、旧字黒瀬道下から新田(三十郎新田)を経て南流し、やがて上香貫の「平方」である「字内吉田」(現御幸町)から「字夜光」(現吉田町)の通称二本松の「三ツ橋」に達する。

道はますます狭くなって、字溝成の旧河道の窪地に対して、左側には自然堤防の微高地で畑地の「字槇島」は今では槇島町となった。やがて悪水払いの排水路となり、「字三貫」付近の田地は三貫地で、一級河川の江川として排水機場も整備されて狩野川に注ぐ。この付近から南側は「浦方」の漁業集落の我入道となる。

香貫山北東側では通称山ケ下の狭窄部、徳倉村(現清水町)の四方沢を境界とする。八重坂の北側には下香貫分の「字外原」が飛び地的にあり、上香貫側に猿石・九十九洞のほか、一ノ洞・二ノ洞・三ノ洞の諸洞が続く。北側では「字天神洞」に田畑が開け、後に小規模



■「上香貫・下香貫・善太夫新田・我入道 四ヶ村絵図」(弘化4年)

桃郷新田（島郷）の吉祥院・題目堂・稲荷社のほか、「御林内」の神明宮が確認出来た。「字古宇森」の畑では桃栽培が先駆的に成されている。コウモリ地名の由来は元村と言われる地であり、砂丘地の窪・小保から崩壊地形や浸食地形を指し、コボ・レ（接尾語）の転訛か。

また交通の要衝に「御高札」の高札場が位置していて、市場の大渡しや黒瀬の渡しの渡津地点、下香貫「八重原」の辻や志下村境の字袋尻に描かれている。我入道では対岸の沼津下河原への渡津地点、「字内新田」（浜方）の渡し場だけでなく、女山の覚院近くに「浦方御高札」が船方（船乗り）に向けて掲げていたことを知る。

御蔵（郷蔵）では元組・平方・新田の「三組御蔵」が「字新田」（現住吉町）の稲荷神社・観音堂の北側に位置しており、下香貫「字仕込」（現宮脇）の地のほか、善太夫新田の「字塩場」の地にも御蔵が位置している。

下香貫「字宮原」の地には「字元屋敷」が記され、背後の山地崩壊による災害が過去にあり、崖錐堆積物の不安定さと直結した荒廃地は、広く畑となっている。西寄りに事代塚の円墳があるが、また塩満にも「字塚田」の田圃の中に円墳の狐塚稲荷があり、文字通りの塚田であったことを知る。なお塩満の場合、「字塩満」もある

が「字塩海路」の広域な集落名の表記があり、中世のカイト（海道）に集落名称の起源の可能性が強まった。

今も上香貫「字谷長洞」の北側には「字鉛山」や「字石切場」があり、エボシ（烏帽子岳）の南洞（字柳ケ洞）に当たる。下香貫「字前角・横山」の尾根寄りには絵図でも「字間ケ洞石丁場」があり、間歩洞の誤記の可能性もある。さらに南側の字前角奥の谷間、字横山・字六反山・字楊原洞の見取り場には等級の低い下々田が点在する。

絵図では下香貫村「浜新田」の見取田が丁寧な描かれ、浜新田・字柿原・字山宮前を仕切る水路や土手として、善太夫新田の塩場の堤や松土手のほか、南側のフケ（字樹）も下香貫と善太夫とで折半し、岸辺の見取田や中土手が「三メ地御林」であったことを知る。潮除堤が御普請所であり、領主が資材等を提供して施行する工事であった。山宮前塚樋も江川塚樋も共に入会で管理かつ維持されていたことが理解出来た。初期の説明では誤解している部分も多かった点を反省したい。

なお絵図の目的である「見取」については、新しく開発した耕地での作柄で年貢、取箇を決定する制度であり、また劣悪地や災害を受けやすい土地に対しては、実際に見分して小作料を定めることにある。

資料館からのお知らせ

夏休み体験コーナーの開設

夏休みの期間中の土・日曜日に、不定期ですが例年どおり、玄関前ピロティで体験コーナーを開設しました。

メニューは、舞錐による火起こし、火打ち金と火打ち石による火起こし、挽き臼による米粉づくりの3種類を用意しました。

猛暑の影響もあり、夏休み中の外出が控えられた影響なのか、参加する人が少なく残念でした。

火打ち石による火起こしは、舞錐法より技術的に進歩して、より簡便に火起こしができるはずなのに、ある程度の慣れが必要で、かえって大変でした。



体験コーナー 火起こし体験の様子

歴民講座の開催について

過去の歴民講座では徳川家康の研究をされている柴裕之さんに断続的ですが、4回に渡り「戦国期の徳川家康と駿東地域との関り」について、家臣の三枚橋城主松井忠次や大久保忠佐などを含めてその統治の姿をお話いただきました。今回はそのまとめを兼ねて、大御所となって駿府に留まり、その地で生涯を終えた、晩年の家康と駿東地域との関りについてお話いただきます。

申し込み等の詳細は「広報ぬまづ」9月1日号を御覧下さい。

なお、本年度は2回の開催を計画しています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2024. 9. 25発行 Vol. 49 No. 2（通巻243号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp